

## 第2章 名勝および天然記念物の本質的価値

### 2.1 本質的価値および構成要素の定義

名勝および天然記念物の本質的価値は、文化財保護法（第2条第4項）において図2.1のとおり定義されており、その枢要の構成要素は「史跡等整備のてびき」（文化庁文化財部記念物課，2005）により図2.2のとおり整理されている。

**第二条** この法律で「文化財」とは、次に掲げるものをいう。

四 貝塚、古墳、都城跡、城跡、旧宅その他の遺跡で我が国にとって歴史上又は学術上価値の高いもの、**庭園、橋梁、峡谷、海浜、山岳その他の名勝地で我が国にとって芸術上又は観賞上価値の高いもの並びに動物（生息地、繁殖地及び渡来地を含む。）**、**植物（自生地を含む。）**及び地質鉱物（特異な自然現象の生じている土地を含む。）で我が国にとって学術上価値の高いもの（以下「記念物」という。）

図2.1 文化財保護法第2条第4項における名勝および天然記念物の価値の定義  
（赤字が名勝、青字が天然記念物の価値の定義を示す）

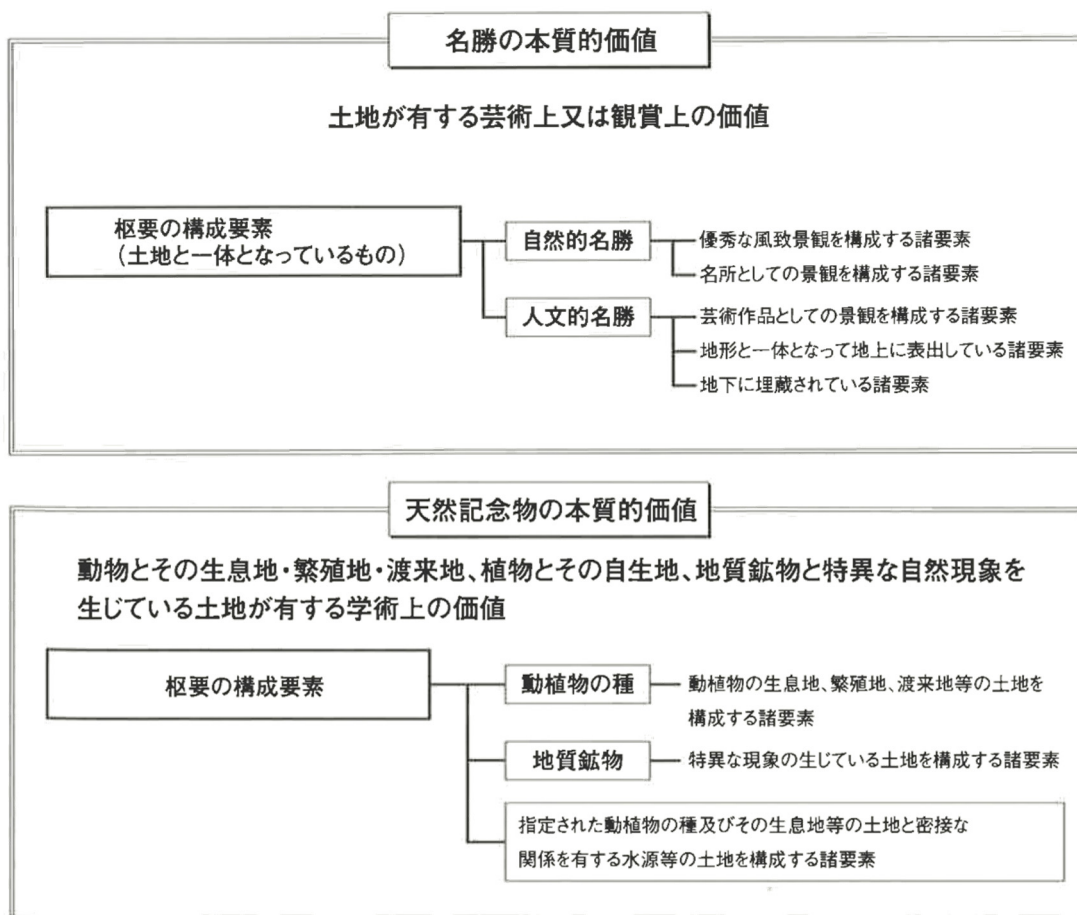


図2.2 名勝および天然記念物の本質的価値の定義と枢要の構成要素  
（「史跡等整備のてびき」（文化庁文化財部記念物課，2005）より抜粋）

名勝「室戸岬」および天然記念物「室戸岬亜熱帯性樹林及び海岸植物群落」の指定は、前者が海岸・島嶼の優れた景観や地質学上の価値、後者は当該地域において特異に形成されている樹林や植物群落の学術的な価値を主体とするものである。名勝および天然記念物ともに指定から90年が経過しようとしており、景観に対する人々の価値観、自然環境の学術的評価、また、自然保護に対する取り組みなどは大きく変化した。これを踏まえ、室戸岬の価値とそれを構成する諸要素について今日的な観点から改めて確認する必要がある。

ここでは、室戸岬の今日的な価値について総括的に検討するとともに、地形・地質学的価値や生態学的価値などの自然的要素、遍路文化をはじめとする歴史的・文化的価値などの人文的要素について整理する。

#### <引用文献>

文化庁文化財部記念物課. 2005. 史跡等整備のてびき―保存と活用のために―□ 総説編・資料編. 同成社, 東京.

## 2.2 対象区域の本質的価値とその成り立ち

### 2.2.1 本質的価値

#### 1) 指定当時の価値

室戸岬にも生育し、天然記念物に指定されている亜熱帯性樹林の四国での分布に関する記録は、古くは1888（明治21）年に田中壤が著した「大日本植物帯調査報告」に、高知県西南部が植物帯として区分された榕樹（アコウ）帯に属する旨の記述がある。また、本多静六は、「日本森林植生帯論」（1900（明治33）年）において四国を暖帯に区分し、四国南部におけるアコウ等の亜熱帯性樹種が生育するとしている。1920（大正10）年3月には足摺半島の松尾集落（土佐清水市松尾）のアコウ群落が本種の四国西南部における代表的な生育地として、「松尾のアコウ自生地」の名称で国の天然記念物に指定されている。

名勝「室戸岬」および天然記念物「室戸岬亜熱帯性樹林及び海岸植物群落」指定の根拠として確認できた最も古い資料として、当時の史跡名勝天然記念物調査会考査員の吉井義次が1920（大正9）年に著した「天然記念物調査報告」（内務省編，1921）が挙げられる（図2.3）。この報告によれば、四国内にはアコウ等の亜熱帯性植物が太平洋沿岸を中心に分布しているが、中でも室戸岬にはアコウやアオギリなどの亜熱帯性樹林や亜熱帯性植物がまとまって分布していることから、「我が国南部に現れたる熱帯性植物区系の北限域として、四国における唯一の熱帯性植物分布地」として学術的に価値が高いと評価されている。加えて、室戸岬周辺の樹林は最御崎寺が所有しているため、周辺域に比べて良好な状態で維持されていること、ウバメガシの形状が他の地域と比較して特異であることから、我が国の天然記念物あるいは名勝として保存に値するとしており、当該地域の植生が天然記念物および名勝の指定を受ける根拠になったと考えられる。

なお、天然記念物の指定基準は、「植物二：代表的原始林、稀有の森林植物相」、「植物五：海岸および沙地植物群落の代表的なもの」、「植物十：著しい植物分布の限界地」、名勝は「八.砂丘、砂嘴（さし）、海浜、島嶼」である。

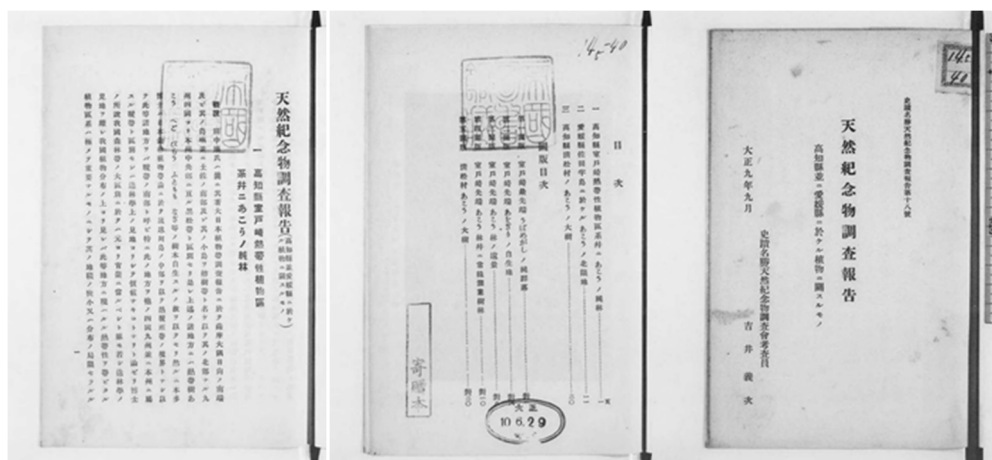


図2.3 「天然記念物調査報告」（吉井義次著）  
国立国会図書館デジタルコレクションより

名勝「室戸岬」および天然記念物「室戸岬亜熱帯性樹林及び海岸植物群落」に指定された当時の詳細解説を以下に示す。

#### 天然記念物 室戸岬亜熱帯性樹林及海岸植物群落 詳細解説

- ▼室戸岬は、四国島の東南端の一大岬角にして、後面一帯の山地はヤマモガシ、オガタマ、ピランジュ等の亜熱帯性常緑樹より成れる密林を以て被われ、タチバナおよびナギに如きもまたその中に産す。
- ▼特に著しきアコウとアオギリの群落にして、前者は山麓に、後者は山腹に亘りて叢生す。
- ▼山側の樹叢中にケホシダ、テツホシダ等の亜熱帯性シダの群落を呈し、また、海岸の斑レイ岩脈の露出せる間にはウバメガシの純群落あり。
- ▼その他、種々の海岸植物群生し、土地の温暖なるにより、冬季もなお花を絶たす為に、岬頭の植物景観をして暖国固有の特徴を呈せしむ。

#### 名勝 室戸岬 詳細解説

- ▼室戸岬は、四国島の南海突出したる一大岬角にして、斑レイ岩の二条の岩脈は主として砂岩および泥板岩の互層より成る。
- ▼中生層を貫き、岬端澎湃たる怒濤の絶えず、岸を拍つところ奇岩乱れ立ち、怪礁碁布し、往々にして海生甌穴を生ぜり。
- ▼岩礁中には、中生層の地質的変動を受けて、断層褶曲変質の諸現象の著しきものあり。
- ▼斑レイ岩脈の冷却凝結の遅速によりて、著しく石理構造を異にするものあり、昆砂砧岩、龍宮岩は岩礁の主なるものにして、空海の目洗池と称するは海生甌穴の一つなり。
- ▼山上は、西方の岬頭行当岬と共に著しき海食台地にして、東寺の堂塔、灯台および測候所あり。
- ▼山麓には、空海修法の崖と称する海食洞崖の水面より約 10m の高位に位して、海退作用ありしを示すものあり。
- ▼海岸の勝地としては、眼界広闊眺望偉大点において類例少なきものに属す。
- ▼後面の山地は多数の亜熱帯性常緑広葉樹をもって蔽われ、タチバナのごときも、またその中に産す、殊に著しきアコウとアオギリの群落にして、前者は山麓に、後者は山腹にわたりて叢生す。
- ▼また、海岸の奇岩乱石の間に、ウバメガシの純群落のほか、種々の海浜植物群生し、土地の温暖なるにより冬季もなお花を絶たず、為に岬頭の景観をして異彩を放たしむ。
- ▼その他、種々の海岸植物群生し、土地の温暖なるにより、冬季もなお花を絶たす為に、岬頭の植物景観をして暖国固有の特徴を呈せしむ。

文化庁国指定文化財等データベースより（指定当時の詳細解説を現代表記に改め、1文ごとに改行して示す。）

天然記念物の解説には、室戸岬の指定当時の植生や海岸の特徴が簡潔に示されている。また、名勝の解説には、上述の植生に加え、室戸岬の地質・地形の特徴、東寺（最御崎寺）、灯台、測候所（現室戸岬特別地域気象観測所）などの建造物、弘法大師空海に関する記述が見られる。

1928年4月に内務省が発行した「天然記念物及名勝調査報告植物之部第八輯」（史蹟名勝天然記念物保存協会編、1928）（図2.4）には、指定直前の室戸岬の様子と47種の植物種（巻末資料5参照）が記載されている。これには、「室戸岬の風景の最も美なる所は西方高岩より岬端の瀧頂浜を経て東北方に転じ、月見浜・龍宮岩を過ぎ、北方毘沙姑岩に至る十数町の間にして、植物の景観亦此地域にありては特に勝れたり」、「風景上より見れば海岸に露出せる怪岸乱石とこれを点綴（てんてい）する植物群落とまた背後の山嶺の密林とは室戸岬の自然美を成すものなるが、其突出せる岬角の前面には一島の眼界を遮るものなく、海天空濶の壮観に接触するは亦此地の特色なり」と、室戸岬の景観的特徴が整理されている。また、道路の開通や墓地の修理に伴う伐採、観光地としての知名度の向上によって増加した観光客による植物群落や樹林の毀損を危惧する旨の記述が確認でき、天然記念物に指定することによる保護の必要性を指摘している。

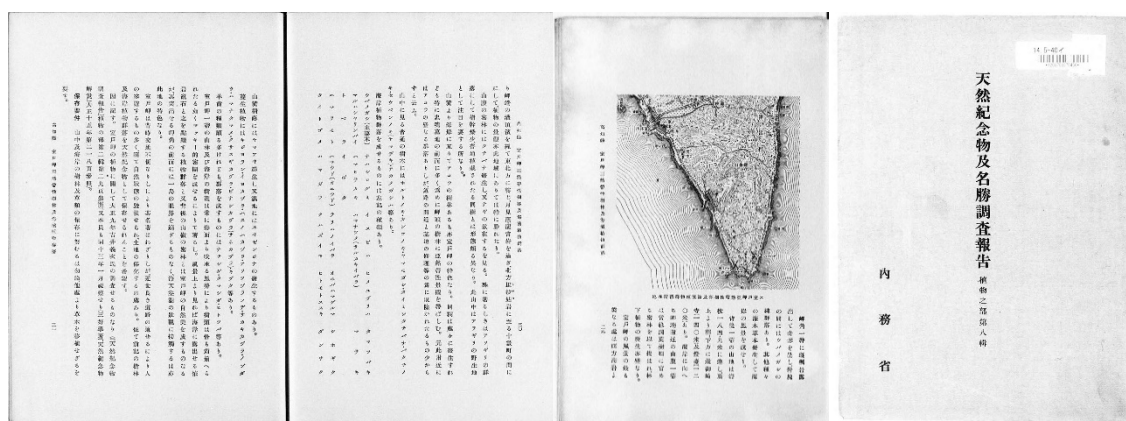


図2.4 「天然記念物及名勝調査報告 植物之部第八輯」（内務省発行）  
国立国会図書館デジタルコレクションより

## 2) 今日の価値

本計画策定において実施した現地調査の結果、名勝および天然記念物の本質的価値は、詳細解説が示す指定当時の状態が保存されていることが確認された。

室戸岬の樹林や植物群落は、それぞれが発達と衰退を繰り返しながらも全体として現在も指定当時の特徴が保存されているものの、海岸部における樹林化の進行、外来種の侵入や野生動物による植物群落への影響などが認められる。また、景観については、約90年前の指定当時と比べると、国道55号や乱礁遊歩道の整備、宿泊施設の移転・建替に伴う変化がある。これら植生や景観の変化は、大局的には天然記念物および名勝の本質的価値に直ちに影響を及ぼすものではないものの、今後の維持管理や観光利用等において留意すべきものである。詳細については第3章で整理する。

これに今日的な価値として、ジオ（大地・地形・地質）を基盤としてそこに成り立つエコ（生態系・生物多様性）、そしてそれらに育まれてきたヒト（歴史・文化）のつながりを重視して地域振興へ結びつけるジオパークとしての知見や評価が新たに加わった。これらを踏まえ、室戸岬の価値を整理すると以下の4点に集約される。

- ◆地質変動の諸現象を示す地形、地層、岩石が保存されている。（地質学的価値）
- ◆地形や地質、また、それを取り巻く海洋がもたらす気象条件により成立した亜熱帯性樹林と海岸植物群落が維持されており、学術的に貴重な場所である。（生態学的価値）
- ◆四国遍路文化に代表される、当地の風土が育んだ歴史・文化が守り継がれている。（人文的価値）
- ◆地形・地質、樹林や植物群落、海、空、歴史・文化が一体となって織りなす景観が良好に保たれており、かつアクセスが容易である。（鑑賞価値）

これらを踏まえ、名勝および天然記念物の両者を総括すると、今日的な本質的価値は以下のように整理される。

四国の南東、太平洋岸に突出した半島の最先端に位置する室戸岬は、まさに海と陸が出会う場所である。そこでは気候変動にともなう海水面の変動と地震による地盤の隆起によって形成された海成段丘からなる特異な地形がみられる。また、南海トラフにフィリピン海プレートが沈み込むことに伴い、海底の堆積物が移動し、はぎとられ順次陸側に付加された「付加体」がその基盤を構成している。室戸岬は、これら地質遺産により世界的にも貴重な場所として学術的に高く評価されることから、ユネスコ世界ジオパークとして認定された。また、この地形や暖流黒潮がもたらす温暖多雨で、しばしば暴風にさらされる厳しい気象条件が、ウバメガシから成る海岸植物群落に加え、当緯度では珍しいアコウやアオギリに代表される亜熱帯性樹林を成立させており、古くからその学術的な価値が評価されてきた。

この厳しくも豊かな風土は、当地に独特の歴史や文化を育んできた。弘法大師の足跡を残す数々の地物は、千代の歴史を刻む四国遍路文化の拠り所として守り継がれ、荒々しい自然と相俟った景観は多くの文人たちの詩歌に詠み込まれている。段丘先端に立つ国内最大級の室戸岬灯台は、100年以上にわたり室戸沖の船舶航行の安全に貢献しており、その存在は歴史的にも文化財的にも高く評価されている。そして、今日当地に住む人々は、これらを地域の誇りとし、培ってきた自然と共生する知恵と暮らしのあり方を後世に引き継いでいる。

室戸岬は、わたしたちが容易に降り立つことができる場所であり、しかも、大地、海、空、文化、歴史が一体となって織りなす壮大な景観を享受できる類まれな地である。その輝きは、1928（昭和3）年の天然記念物・名勝の指定から時を経た今もなお失われることなく保たれている。

<引用文献>

本多静六. 1900. 日本森林植物帯論. 本多静六, 東京.

内務省 編. 1921. 史跡名勝天然記念物調査報告第十八号 天然記念物調査報告 高知県並ニ愛媛県ニ於ケル植物ニ関スルモノ. 内務省, 東京.

史蹟名勝天然記念物保存協会 編. 1928. 天然記念物及名勝調査報告 植物之部第八輯. 内務省, 東京.

田中壤. 1888. 大日本植物帯調査報告. 内務省地理局, 東京.

## 2.2.2 本質的価値の構成要素

前節で整理した本質的価値を構成する要素の概要について自然的要素と人文的要素に区分して以下に示す。

### 1) 空と海、新しい大地と亜熱帯植物が織りなす自然的景観【自然的要素】

- ◇海成段丘、ビシャゴ岩や烏帽子岩に代表される奇岩、海食洞やポットホール（甌穴）、著しく褶曲した時代を異にする三段の地層から、地球の営力による新しい大地の誕生を推理できる。
- ◇2008（平成 20）年の世界ジオパークへの認定により、上述の価値が科学的に補強されたとともに、室戸岬の新たな活用の可能性が拓かれた。
- ◇沖合を黒潮が流れる室戸岬は、温暖多雨な気候であり、四国では稀な南方系要素の植物が多数生育している。中でもアコウとアオギリが亜熱帯性樹林を形成しており、これらの種や樹林の分布限界に位置することから、学術的価値の高い地域と評価されている。
- ◇急傾斜の段丘崖や海岸に生育するウバメガシは暴風にさらされ、あたかも刈り込まれた庭園樹のような樹形を呈しており、台風の常襲地帯でもある厳しい室戸岬の環境を反映した風衝樹林<sup>1</sup>を形成している。
- ◇室戸岬周辺の浜辺では、他の地域では減少傾向にあるシオギクやハマゴウなどの海浜植物群落が形成されており、季節を問わず花々を楽しむことができる。
- ◇これら樹林や海岸植物群落は多様な動物の生息環境になっており、室戸岬の生物多様性を維持する重要な基盤となっている。

### 2) 遍路文化、厳しい自然に生きる人々の暮らしが育む人文的景観【人文的要素】

- ◇御蔵洞と一夜建立の岩屋、札所や遍路道といった空海の足跡（空海伝説）を示す地物が数多く残されている。
- ◇国内外からの数多くの巡礼者（お遍路さん）と観光客が訪れ、お接待の精神が息づき、それら遍路文化の拠り所として受け継がれてきた。
- ◇岬先端の室戸岬灯台は、紀貫之の時代から航海の難所と知られる岬沖における航海の道標として重要な役割を果たしており、その歴史的ならびに文化財的価値は高い。
- ◇厳しい自然環境にありながらも地域住民はこの自然を活用し、共生する知恵や暮らしのあり方を見出し、四季折々の恵みを楽しんできた。
- ◇日本新八景選定（1928（昭和 3）年）以降観光地として注目され、これまでに多くの観光客を受け入れながらも、地域の高い意識のもと室戸岬の自然が保全されてきた。
- ◇これからも地域の生活および基幹産業である観光の重要な資源であることに変わりはなく、持続可能な地域づくりの軸としての役割を担う場所である。

---

<sup>1</sup> 風の強い山の稜線や海岸などに生える木は、一定の方向から吹く風によって風下側に枝がのびる独特の樹形になる。これを風衝樹形（ふうしょうじゅけい）と呼び、このような木で構成される樹林を風衝樹林（ふうしょうじゅりん）と呼ぶ。



## 2.3 本質的価値を構成する諸要素

本質的価値の全体像のイメージを容易にするため、図 2.3 に示す「ジオ（大地・地形・地質）」を基盤としてそこに成り立つ「エコ（生態系・生物多様性）」、そしてそれらに育まれてきた「ヒト（歴史・文化）」のつながりを“ストーリー”として語れるジオパークの概念を用いて整理した本質的価値を構成する諸要素を以下に示す。

### A. 地球の営力を実感できる地質・地形（海と陸が会い新しい大地が誕生する最前線）

【地質】岩盤露頭に表れた四万十帯の地層（付加体）

- 本来、地層群である典型的な付加体や氷期-間氷期の海水準変動と、地震隆起によって生じた海成段丘を世界で最も容易に観察できる。

【地形】南に尖った三角形の半島／離水地形（海食洞・波食台・海食崖・ポットホール）

- 付加体の成長と地震隆起の証拠である完新世の海成段丘は日本を代表する海成段丘で、段丘崖から段丘面を一望でき、大地の成り立ちを容易に理解できる。



ジオサイトでのツアー  
（提供：室戸ジオパーク推進協議会）

### B. 岬の地形と温暖多雨で強風にさらされる気候に成立した植生

【植物群落】亜熱帯性樹林および海岸植物群落（天然記念物）／南方系要素の植物種

- 温暖多雨な亜熱帯的な気候にあるため、南方系要素の植物であるアコウとアオギリが樹林（群落）を形成し、四国の他の地域では稀なナギやバクチノキ、クワズイモが多数生育している。室戸岬はこれらの樹林や種の成立・生育限界にあり、それらが良好に保存されていることから、古くから学術的に高く評価されている。
- 室戸岬で広くみられるウバメガシ林は急傾斜地や風衝地に生育しており、特に風当たりの強い海岸部では樹高が 2～3m と低く抑えられており、樹幹が複雑に屈折した個体も多くみられる。このような風衝樹林の形成は、急傾斜地である地形的要因と、強い風の影響を常に受けるという室戸岬端部の気象によるものである。これら室戸岬の環境を反映した樹形は異彩を放っている。
- 岬の先端部から東側の海岸部には、代表的な海浜植物であるハマゴウ、ヒトモトススキおよびテリハノイバラが群落を形成している。



海岸樹林内に生育するアコウの大木

【貴重な植物】天然記念物／絶滅危惧種／分布域限定種

- 段丘面（最御崎寺の境内など）のシイ林には県の天然記念物であるヤッコソウが自生している。また、段丘崖の樹林内には、絶滅が危惧されるラン類、県内や国内における分布が限定的な種も多数自生しており、室戸岬の樹林は人為的な攪乱が少ない良好な状態で維持されてきたと推察される。
- 徳島県南部から高知県東部にしか生育しないシオギクが群落を形成しており、生育適地が減少しつつある本種にとって貴重な環境であることが示唆される。



最御崎寺境内に生育するヤッコソウ

C. 古代より受け継がれてきた空海伝説と遍路文化の足跡

【空海ゆかりの地物】御蔵洞／一夜建立の岩屋／捻岩／目洗いの池／行水の池

- 平安時代の僧侶空海が精神鍛錬の場として訪れ厳しい修行を積んだ様子を彷彿させる、隆起と海食により形成された特徴的な地形がほぼ原形を留めた状態で残されている。
- 空海の足跡（空海伝説）を示す多くの地物（地形）が集中しており、比較的狭いエリア内で伝説探訪が可能である。



御蔵洞から海を望む  
(提供：室戸ジオパーク推進協議会)

【信仰および遍路文化を支える地物】寺院／遍路道／

信仰対象とされている地物

- 空海ゆかりの四国霊場を構成する寺院や遍路道が維持され、また、空海にまつわる地域の信仰の対象物が受け継がれており、国内外からの多くの巡礼と来訪者を迎えている。

D. 近代より航海者を見守り続けてきた道標

【岬端部の地形および灯台】

- 室戸岬灯台は、半島の先端に建造された国内最大級の第一等灯台である。日本に5か所しかない直径2.6mの第一等フレネル式レンズを備えており、光達距離26.5海里は日本一である。室戸岬の特徴的な地形とあいまって、室戸沖の安全な船舶航行に重要な役割を果たしてきたことを示している。
- 1899（明治32）年に投光を開始した鉄造の灯台は、海上保安庁により最も評価の高いAランクの保存灯台に、経済産業省により近代産業遺産に選定されており、歴史的ならびに文化財的な価値が高く評価されている。



室戸岬灯台

### E. 自然と共生する暮らしのありようを示す土地利用・建造物

#### 【地域住民により守り活かされてきた岩礁】

- これまで、住民の高い保全意識のもとに守られてきた岩礁は、四季折々の自然の恵み（ハマアザミ、クロメ、ノリ、魚介類）に接する場として持続可能な利用がなされており、当地域における暮らしのありようの一端が垣間見られる。

#### 【建造物】

- 建物が低密度な状態に保たれている。平地が少なく厳しい気象にさらされる土地条件と最御崎寺による土地所有の歴史があったこともうかがえる。
- 建物の高さが低く抑えられ、一部に古い様式の建物が残されている。厳しい気象と共存する暮らしの知恵がうかがえる。



ハマアザミ

### F. 独特の海底地形と黒潮に支えられた地域の暮らし（区域外）

#### 【クジラ漁・沿岸漁業】

- 室戸岬近海は海底地形とその南方を流れる黒潮により、クジラ類を筆頭にした豊かな漁場が形成されており、藩政時代から培われてきた捕鯨や漁業は地域の基幹産業となり、地域の経済や文化に大きな影響を与えてきた。

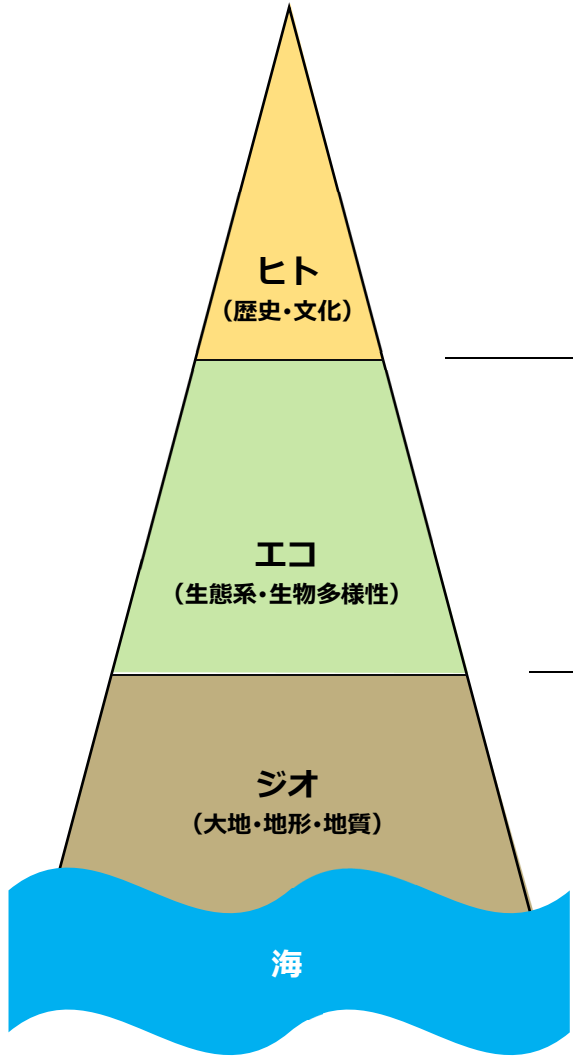
#### 【海洋深層水】

- 室戸岬東海岸側の海底崖に衝突して湧昇する海洋深層水は清浄性が高く、栄養塩（ミネラル）が豊富で、新たに開発された地域の資源として医療や産業への有効活用が進められている。



浮津西町の浜でのクジラの解体の様子  
(室戸市教育委員会ホームページより転載)





(ジオパークの概念)

**D.近代より航海者を見守り続けてきた道標**

【岬端部の地形および灯台】



室戸市観光ガイドブックより転載

**E.自然と共生する暮らしのありようを示す土地利用・建造物**

【未利用地として守り活かされてきた岩礁】

【建造物】



**C.古代より受け継がれてきた空海伝説と遍路文化の足跡**

【空海ゆかりの地物】

御蔵洞／一夜建立の岩屋／捻岩／目洗いの池／行水の池

【信仰および遍路文化を支える地物】

寺院／遍路道／信仰対象とされている地物

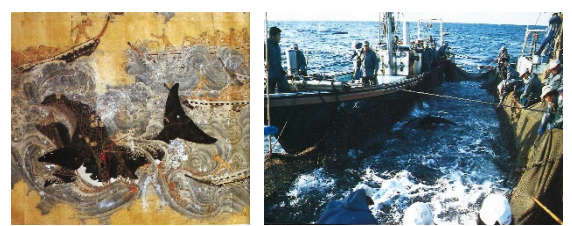


室戸ジオパークパンフレットより転載

**F. 独特の海底地形と黒潮に支えられた地域の暮らし (区域外)**

【クジラ漁・沿岸漁業】

【海洋深層水】



室戸市史下巻より転載



世界ジオパークネットワーク加盟申請書より転載

**B.岬の地形と温暖多雨で強風にさらされる気候に成立した植生**

【植物群落】

亜熱帯性樹林および海岸植物群落 (天然記念物) / 南方系要素の植物種

【貴重な植物】

天然記念物 / 絶滅危惧種 / 分布域限定種



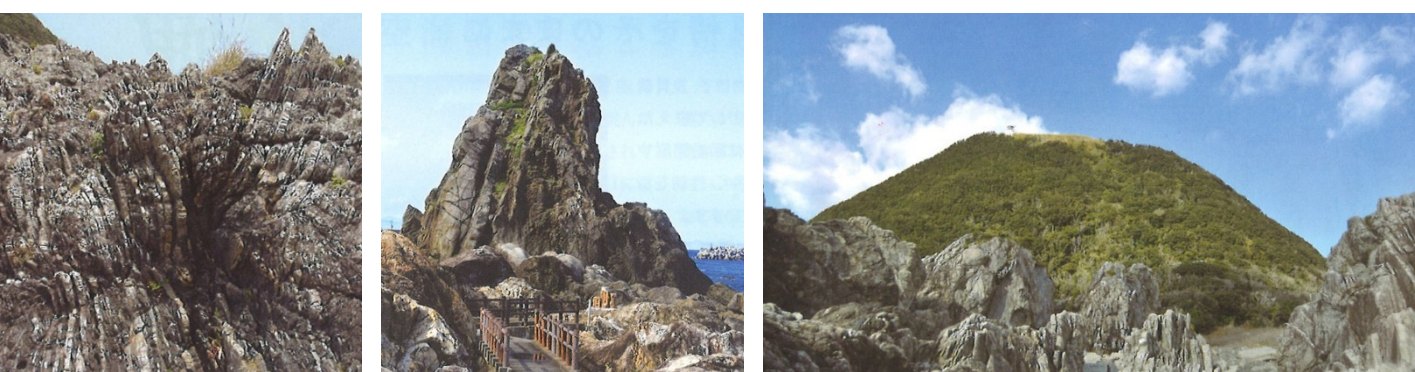
**A.地球の営力を実感できる地質・地形 (海と陸が会い新しい大地が誕生する最前線)**

【地質】

岩盤露頭に表れた四万十帯の地層 (付加体)

【地形】

南に尖った三角形の半島 / 離水地形 (海食洞・波食台・海食崖・ポットホール)



室戸ジオパークパンフレットより転載

**ジオパークの概念を用いる意義**

- ・土地 (ジオ) を基盤として成り立つ生態系、それらに育まれてきた人 (今の暮らしを含む歴史文化) をイメージしやすい。
- ・ジオ、エコ、人のつながりを“ストーリー”として語る。

**天然記念物について**

「亜熱帯性樹林および海岸植物群落」ほか、天然記念物は当名勝の自然的要素の一つに位置づける。

図 2.3 価値の全体像と成り立ち

